

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370447

研究課題名(和文) 重層的パ-スペクトの組織化と活動動詞「スル」の普遍的意味特性に関する意味論的研究

研究課題名(英文) Semantic Study of the Organization of Multilayered Perspectives and Universal Meaning of "Suru" in Japanese

研究代表者

山森 良枝(松井良枝)(Yamamori, Yoshie)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70252814

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多様なふるまいを示す日本語動詞の基本形「スル」を、真偽の定まらない多値論理的な文脈に据えることにより、「スル」の意味特性を捉えることができるとの観点から、従属節事象先行型解釈(スル<シタ)や、ガ-デンパス効果の低下機能などの現象の背後にあるメカニズムと「スル」の関係を分析することにより、「スル」の意味特性が特定の時間に束縛されない時間的unboundednessにあることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study compares the simple present form (known as the ru form) with the inflected form (ta form) in Japanese, based on their semantic characteristics. Japanese activity verbs ending in ru are ambiguous with respect to being read as future or habitual in the matrix clauses and past in the subordinate clauses. We investigate the question of how such an ambiguity/multiple readings can arise for verbs ending in ru. We pursue this question by assuming that ru plays a role to make a sentence in which ru appears denote propositional concept and show that verbs ending in ru express state of affairs temporally unbounded to some specific time in the actual world, that is generic tense' in the sense of Dahl(1975).

研究分野：人文学

キーワード：スル パースペクティブ・シフト 多値論理 命題概念 ガ-デンパス効果 temporal unboundedness

1. 研究開始当初の背景

時制を言語的に構築して行く上で、事象を「シタ形事象<スル形事象」の順に線的に配列することは重要な方略である。従属節の時制も、主節時を基準に、事象を「シタ形事象<スル形事象」の順に配列する点で同じ方略に従っている。Kaplan(1977)が、現行の文脈とは別の文脈に基づいて指示対象を指定する要素を<モンスター->と呼んで排除したように、一定のパ-スペクティブを保持することは、文理解に極めて有用な方略である。しかし、一人の話者が一つの出来事について述べる文の途中でパ-スペクティブがシフトし、複数のパ-スペクティブが混在するという現象を考えるためには、それだけでは不十分である。文の中で異なるパ-スペクティブが交叉する現象には、logophoric pronoun や混合話法がよく知られており、その分布条件や分析方法が従来より提案されてきた。しかし他方で、同時に積み重ねられた異次元のパ-スペクティブの集合(「重層的パ-スペクティブ」と呼ぶ)が関係する以下のような現象に対しては十分な分析はなされてこなかった。重層的パ-スペクティブが関わる現象には、複数の世界を設定する「WH でも/どんな N でも」のような自由選択項目、直接引用符ではない機能をもつ「語用論的括弧」、「太郎は昨日食べ過ぎるから、お腹をこわしたんだ」のカラ節で、過去を表し、カラ節が表す話者のパ-スペクティブ(「食べ過ぎだ」とは異なる主語・太郎のパ-スペクティブ(「食べ過ぎてはいない」)を伴立する「スル」等がある。これらの現象を分析するためには、記述通りの意味を捉える外延的分析ではなく、内包的な意味の記述と分析が可能な理論と方法論が必要になる。しかし実際には、その不足が、時制解釈のみならず多様な意味用法を持つ「スル」の普遍的な意味特性に関する理論的研究を遅らせてきた要因である。これに対して、研究代表者は、「スル」が異なるパ-スペクトでは異なる真理値を取る多値論的な命題(厳密には「命題概念」)を表示するという文脈に据えて、時制や「スル」の意味特性を研究することが重要であるとの立場から、パ-スペクティブが異なれば命題への評価も異なるという多値論的・重層的なパ-スペクティブの組織化と「スル」の意味の成り立ちの連関の問題に注目してきた。同様の関心は、異なる世界で異なる値を取る「命題概念」に注目して文脈と言語形式の関係を捉え直そうとする Stalnaker(1999)や自由選択項目に関する Alonso ら(2010)の研究でも窺うことができる。これらの研究は当該命題の評価文脈としてのパ-スペクトの集合に注目し、その全体を俯瞰し記述することを可能にする分析方法の探求に重大な関心を寄せる点で、本研究計画と深い関連を持っており、研究代表者は、重層的パ-スペクティブの形成と「スル」の問題を統一的視座の

とで研究するという着想が現実的で生産的な研究プランであると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、従来の研究に欠落していた重層的パ-スペクティブという枠組みに「スル」の意味生成プロセスを埋め込むことにより、非定常的な「スル」の意味の推移・生成の実態を具体的に把握し記述するとともに、それを可能にする理論と方法論の開発に大きく貢献することを目的としたものである。具体的には、以下の4点を目的とした。

- (1)パ-スペクティブの所在、および、伴立されるパ-スペクティブの実態に注目しつつ、重層的パ-スペクティブの組織化の実態を究明する。
- (2)カラ節主語と主節主語あるいは発話主体やカラ節の元発話者が同一指示の場合、重層的パ-スペクティブが成立しない可能性がある。このような場合における(過去を表す)「スル」の認可条件を明らかにする。
- (3)未来時制や属性表示、ガ-デンパス効果の中和など多様な用法を持つ「スル」の論理特性は何か、そして、それと重層的パ-スペクティブはどのように関係しているのか、また、そこから「スル」の分布条件はどのように説明されるのか、を究明する。
- (4)(1)-(3)の研究結果に基づいて、重層的パ-スペクティブと「スル」に関する包括的意味論を構築する。

3. 研究の方法

本研究の目的を遂行するために、設備備品費で請求したデータベース検索編集装置を用いて、多様な一次資料を収集し、そこから該当する事例を検索・集積して、分析対象となるデータを整理し、データベース化を図った。それとともに、意味論的観点から、パ-スペクティブの在り処、および、伴立されるパ-スペクティブの認知主体が、当該文の統語構造や文脈上のパラミター(発話主体、時間、パ-スペクティブ)の何とどう関係しているのかについて、その実態を記述し、重層的パ-スペクティブがどのように組織化され、「スル」の多値論的な意味が生成されるのか、その実態を明らかにした。また、「スル」が多値論的な意味を有することの傍証として、「スル」を主動詞とするガーデンパス文で、ガーデンパス効果が低下する現象をとりあげた。これらの研究の過程で明らかになった記述上・理論上の問題点を随時把握して、分析方法を点検した。そうして得られた成果は、内外の学会やワ-クショップで発表・討議して精度を向上させ、最終的な研究成果をまとめたものを学術振興会の出版助成を得て図書として上梓した。

4. 研究成果

主要な成果を列挙する。

- (1)「スル」は、動作動詞の場合、主文では未

来時制、カラ/ノデ節で過去時制を表し、状態動詞の場合には普遍的属性を表す等、多様な意味用法を持つ。これらの多様な用法に通底する「スル」の特性として、当該文を、「命題」ではなく、異なるパ・スペクトでは異なる真理値を取る「命題概念」にシフトするパースペクティブ・シフターの特性が指摘できる。(cf. 図書1)

- (2)異なるパースペクティブを導入する点において、「スル」と類似の機能を持つ括弧「語用論的括弧」の存在を新たに示した。カラ/ノデ節で過去時制を表す「スル」や「語用論的括弧」の使用は、当該文脈で排除されている話者の主観を新たに挿入し、所謂 De Re の解釈を作り出すための日本語固有の方略である。(cf. 図書1)
- (3)「スル」を主動詞とする場合、ガーデンパス効果が中和され、低下する。この現象の背後に「スル」の真偽を固定しない多値論理的特性が本質的に関係している。このことは、(1)の傍証となる。(cf. 論文4,8)
- (4)命題を命題概念にシフトする機能と、過去・現在・未来に亘る時制表示との連関をよりよく説明する「スル」の特性として、「スル」が時間的 unboundedness を特徴とする generic tense (Dahl, 1975)の表示に特化した形式であることがあげられる。(cf. 論文6,7)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)(全て査読有)

1. 山森良枝,「武内道子著『手続きの意味論 - 談話連結語の意味論と語用論 - 』」『日本語文法』16 巻 2 号 : pp.153-161.(平成 28 年 10 月)
2. Yamamori Yoshie, “The Effect of Present Activity Verbs on Processing Structural Ambiguity in Japanese Garden-path Sentences”, In *Journal of Cognitive Science* 17-3: pp.4 69-497. (平成 28 年 10 月)
3. 山森良枝,「(Non)genericity とテンスの形式」『第 33 回日本認知科学学会大会発表論文集』:pp.534-541.(平成 28 年 9 月)
4. 山森良枝,「状態性述語におけるル形と夕形の分布と意味的制約」In *9th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPJL) Conference Handbook*. (平成 28 年 6 月)
5. 山森良枝,「中国語の結果複合動詞について 日本語の結果複合動詞との対照から」『GR 同志社大学グローバル地域文化学会・紀要』: pp.69-96. (平成 28 年 3 月)
6. Yamamori Yoshie, “The Effect of Present Activity Verbs on Processing Structural Ambiguity in Japanese Garden-path

Sentences”, In Gabriella Airenti, Bruno G. Bara and Giulio Sandini (eds.) *Proceedings of the EuroAsianPacific Joint Conference on Cognitive Science*: pp.526-531. (平成 27 年 9 月)

7. 山森良枝,「前提の投射における left-right asymmetry と「Pかもしれない」について」『第 32 回日本認知科学学会大会発表論文集』: pp.670-679. (平成 27 年 9 月)
8. 山森良枝,「基本形の論理特性と文の構造的曖昧性の処理」『第 31 回日本認知科学学会大会発表論文集』: pp.311-317. (平成 26 年 9 月)
9. 山森良枝,「語用論的括弧について」In *8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPJL8) Conference Handbook*: pp. 116-119.(平成 26 年 3 月)

[学会発表](計 6 件)

1. 山森良枝,「(Non)genericityとテンスの形式」第33回日本認知科学学会(北海道大学、札幌市) (平成28年9月17日)
2. 山森良枝,「状態性述語におけるル形と夕形の分布と意味的制約」, The 9th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPJL), San Francisco State University, San Francisco, June 4,5. (平成28年6月4日)
3. 山森良枝,「前提の投射における left-right asymmetry と「Pかもしれない」について」第32回日本認知科学学会(千葉大学、千葉市) (平成27年9月20日)
4. Yamamori Yoshie, “The Effect of Present Activity Verbs on Processing Structural Ambiguity in Japanese Garden-path Sentences”, EuroAsianPacific Joint Conference on Cognitive Science (4th European Conference on Cognitive Science, 11th International Conference on Cognitive Science), University of Torino, Torino Italy, September 25-27. (平成27年9月26日)
5. 山森良枝,「基本形の論理特性と文の構造的曖昧性の処理」第31回日本認知科学学会(名古屋大学、名古屋市) (平成26年9月20日)
6. 山森良枝,「語用論的括弧について」, The 8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPJL8), 国立国語研究所, 東京都、立川市, March 22,23. (平成26年3月22日)

[図書](計 1 件)

1. 山森良枝『パ・スペクティブ・シフトと混合話法』(ひつじ書房)全 p.180 (平成 27 年 2 月).

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山森 良枝 (Yamamori Yoshie)
同志社大学・グローバル・コミュニケー
ション学部・教授

研究者番号：70252814

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()